

緑のはぐくみ会 活動開始

村・社会福祉協議会では、このたび60歳以上の健康で仕事に意欲のある方を対象に、軽作業的な活動をしていただける方を募集したところ、緑のボランティアの会と横越新田高齢者グループからなる「緑のはぐくみ会」が結成され、結成式が5月12日、新田のコミュニティセンターで開催されました。

会員60名により結成されたこのグループの主な活動内容は、国道49号沿い歩道、阿賀野川床固め公園、茜ヶ丘公園、村道57号線脇の除草、清掃及び低木管理などです。

結成前の5月8日には、試験的に国道49号脇の除草作業が、28名の参加者のもと一日がかりでおこなわれ、結成後の8月29日には、阿賀野川床固め公園の除草、清掃作業を行うなど意欲的な活動が大変期待されます。

今後の村・社会福祉協議会の取組みとしては、この会の趣旨の説明を各地区ごとに行い、人材をより広く募集し将来法人としてのシルバー人材センター設立に向け支援していく予定です。



国道49号沿い歩道の除草作業

フォーラムよごしを開催

8月24日、JA亀田郷みなみ横越支所で「環境にやさしい農業への取り組み」と題したフォーラムが、「阿賀の里づくり・よごし」と「食路21」の共催で開催されました。

今年で2回目の同フォーラムは、農業生産者と消費者との間に生じる諸問題を考える場として開催されたもので、村民等約50名が参加し、新潟日報論説委員長の相沢健二氏をコーディネーターに、本村の酪農経営者等5名のパネリストと2名の助言者による討論が繰り広げられました。

重点的に取り上げられた内容は、地域周辺の住民に対する家畜の臭い、農薬の薬剤散布、稲わらの焼却による煙問題で、今後いかに生産者は取り組むべきか、また住民の理解が得られるにはどのようにすればよいか真剣に話し合われました。



JA亀田郷みなみ 五十嵐組合長による挨拶

話題のニュースポーツ ターゲットバードゴルフを楽しむ

村教育委員会では、ニュースポーツの普及を目的に今話題の「ターゲットバードゴルフ」の講習会を開催してきました。この講習会の総仕上げとして、9月1日には競技会が開かれました。

参加者は若者から高齢者までの男女20名が参加。総合体育館前芝広場に設定された専用コース（5ホール）を2周、約2時間をかけてプレーを楽しんでいました。

ターゲットバードゴルフとは、羽根の付いたゴルフボールをゴルフクラブ（ピッチングウェッジまたはサンドウェッジ）を使って打ち、傘を逆さにしたようなホールに何打で入れられるかで競う種目です。

総合体育館では、この専用コースを11月末まで設定、一般に開放していますので、気軽にご利用ください。



ナイスショット

姉妹村

美浦村との ホット情報交換 (その6)

E1 E1ものいっぱい 美浦が育てた農産品①

コメどころ新潟県の今年の収穫はいかがですか？。ホクホクしたおいしい新米が食卓を飾っているのではないのでしょうか。さて、このコーナーでは、今月号と次号で美浦村の農産品について掲載します。

E 美浦活動

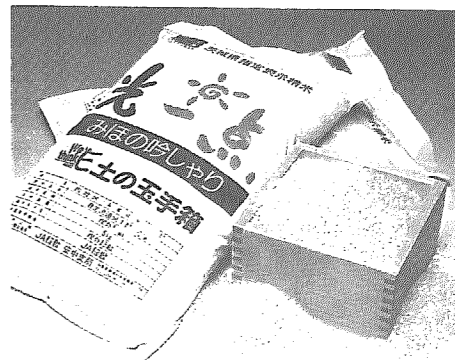
美浦村では、Eで始まる三つの言葉

「永続性…Eternity」

「環境…Environment」

「誠実…Earnest」

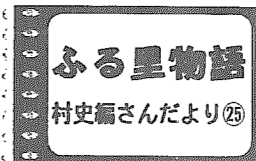
をキーワードとしたWe think E.M.H.O(私たち美浦はEを考えます)というキャッチフレーズを平成四年につくり、この『E美浦活動』を基本に村づくりを進めています。農業についてももちろん、これらをモットーに、環境を重視しながら、消費者に誇れる農産品の生産を進めています。



みほの吟しやり『光一点』

美浦村は、温暖な気候、適度の降水、土壌と、おいしい米を生産する条件が整っており、米は、村農産品の基幹作物です。また、最近では、一ヘクタール区画の大型圃場も整備されるなど、将来を見据えた整備も進められています。このような中、美浦米は評判が高いのですが、中でも農薬をほとんど使わず、JRA美浦トレーニングセンターから出る敷わらたい肥を多く使い、しかも太陽熱を利用した自然乾燥によって生産されたブラ

ンド米『光一点』は、「安全でおいしい」と、消費者からたいへん喜ばれています。
このように、安全とおいしさを追求めた美浦村が誇る減農薬有機コシヒカリ米『光一点』は、環境重視の美浦村のイメージアップと知名度の向上はもちろん、きたるべき自由化産地間競争においても対応できる、21世紀への米づくりの挑戦といえます。



横越に草庵を結んだ
長門の俳人雨江

江戸時代、俳諧は庶民文芸として盛んに行われていました。俳諧に熱中して家を継がず、諸国を放浪する俳人も少なくありませんでした。

天保三年（一八三二）十月、横越に草庵を結んで俳諧を教えた柳翠庵雨江もその一人です。

雨江は長門（山口県）吉田の人で、本名藤井藤次郎、娘が一人いるのに、家を弟に譲って旅に出ました。美濃（岐阜県）で

美濃派九世徐風庵にさらに俳諧を学んでから越後に来ました。越後は各務支考、仙石廬元坊という美濃派の盛んな所です。

新潟から横越に来たところ、横越の人たちは雨江を引き留め、庵を造るように説得しました。

その発起人は耳順（六十歳）に近い萱月亭東雲であり、而笑、可薫、織月その他の人たちです。

雨江はそれらの人たちの温かい人情に動かされて、お寺（東林寺とあるが通琳寺か）の境内に小庵を結び、遊履庵と称し、野鶴子という号を新しく用いました。

而笑が中心となって師匠の文台開きの句会を催し、察応という人が漢文で「遊履庵之賦」を作っています。

雨江は身体が弱く、翌四年六



今も横越神社に残る安政5（1858）年の献額。
選者は雨江と親交のあった織月とある。

月に新潟へ戻り、同年十月西蒲原味方村の笹川嘉治右衛門宅に身を寄せ、七月五月に病死してしまいました。没後、故郷へ遺品が送られ、雨江の孫にあたる藤井清太郎氏が『俳哲 柳翠庵雨江』を出版しました。

江戸時代には一芸（俳諧だけでなく漢詩文、絵画、剣術等々）をもって諸国を渡り歩いた人が多く、越後の人はそういう人を温かく迎え入れています。雨江を迎えた横越の東雲、而笑、可薫、織月など、また漢文を書いた察応などの実名が分かりません。読者のご先祖のなかにそのようなお方はいないでしょうか。（近世部会 帆刈喜久男）